

「鹿島神宮文書」にたどる常陸の中世（ ）

治承4年(1180)、源頼朝は常陸国府を掌握した後、金砂合戦で佐竹氏を破り、常陸国をほぼ支配下におきました。「武家護持の神」として厚く鹿島神宮を信仰していた頼朝は、大窪郷(日立市)や橘郷(行方市、小美玉市)などを同社に寄進しました。古代より国衙との結びつきも強く常陸国一宮としての権威を誇ってきた鹿島神宮を、東国における信仰の中心として存続させるための保護政策でした。その後、中世を通じて、鹿島神宮の祭神である武甕槌神は武神として多くの武士の尊崇を集めました。

鹿島神宮所蔵「鹿島神宮文書」は全18巻の巻子に表装され、中世文書を中心とする約250点の史料が収められています。これらの文書は、千葉県かつりの香取神宮文書かとりとならんで関東神社関係文書の双璧そうへきです。「鹿島神宮文書」には源頼朝下文、足利尊氏御教書、関東下知状、佐竹義宣書状など、武家関係文書が豊富に収められています。

「鹿島神宮文書」の中から、中世の鹿島神宮と常陸国の武家との関わりを示す史料を中心に常陸の中世を以下にたどります。